

追悼—堀忠雄先生

田中 秀樹[✉]

広島国際大学 健康科学部

2021年6月29日、堀忠雄先生が76歳で永眠されました。76歳でした。1年以上の月日が流れましたが、堀門下生の一人として、先生との思い出を綴りたいと存じます。「堀先生に出会っていなければ、今の自分はありません・・・」、一人のかみしめるような言葉を発端に、「俺もだよ!」「僕もです!」としみじみつづく。堀忠雄先生のお通夜には、大学や研究所で研究、教育に携わっている堀研究室出身者が全国からお別れに駆けつけました。「睡眠心理学」(北大路書房, 2008)は、堀先生のご指導のもと博士号を取得した門下生12名(広島大学の林光緒先生、小川景子先生、駒沢大学の岩城達也先生、産業技術総合研究所の甲斐田幸佐先生、福島大学の高原円先生、理化学研究所の玉置應子先生等が大学や研究所で睡眠や生体リズムの研究に従事)が執筆していますが、その大半が通夜、葬儀の場にいました。堀先生が指導された最後の博士号取得者、阿部高志先生(現:筑波大学)もおられました。国際学会では、いつも自然と一緒に行動しているメンバーでの会話でしたが、現実を受け止めきれず、ぼっかり穴があいた感覚に包まれていました。北海道大学の松浦倫子先生、労働安全衛生総合研究所の池田大樹先生も堀先生の後継者の林先生のご指導で学位を取得した孫弟子、堀門下生です。

堀先生の研究への姿勢、指導は徹底していました。データに真摯に向き合う姿勢はもちろんですが、データ解釈にも慎重で、「別のデータ分析もやってみて」、「ローデータから見直してみても」と指導されることもありましたが、意欲的な高齢者の多くが30分以内の昼寝をとっているとの結果が出たときには、当時、高齢者の昼寝はnegativeなイメージがあった時代だったので、「データ入力からもう一度やり直してみても」と指示され、堀研究室全員でデータ入力からやり直しました。しかし、再分析の結果は、高齢者の30分以内の昼寝がPositive、1時間以上の昼寝はnegativeに機能することを示すデータでした。堀先生は、覚悟を決め、そのデータをもって科学技術庁の研究発表会に

いかれました。ドキドキしながら見送りましたが、堀先生は朗報と共にかえって来られ、「〇〇大学もうちの結果を支持するようなデータ出していたよ。良い発表になったよ、ありがとう」と皆をねぎらってくださいました。これは25年以上たった今も忘れることのない思い出で、私の高齢者の睡眠研究のスタートにもなりました。堀先生は、学会発表に関しても、熱心に丁寧に指導していただきました。「原稿用紙400字あたり、話口調で1分」、「図の縦軸、横軸をしっかりと説明し、これをご覧になると、〇〇ということがわかります。そこで、次に・・・の流れ」、「次に出るスライドを聴衆が想像できるように話さない」、「発表原稿はスライドと対応させて丸暗記」、いずれも大学院生の時代に堀先生に教えていただいたことです。広島大学を退官されるまで、学会、出張中の堀先生のカバンの中には、いつも大学院生の論文原稿が数本ありました。航空機や新幹線での移動時間にも論文添削をされている姿を拝見することは珍しくありませんでした。

「こうすれば、こうなる!を実感させることが大切」これは、私が広島大学の助手の時にお酒の席でお聞きした堀先生のお言葉です。二人とも結構酔っぱらっていましたが、不思議と覚えています。堀先生は、研究者、教育者人生の道標でもあります。私が広島国際大学に就任した際に、堀先生からいただいたお言葉「田中さん、学生指導に大切なのは忍耐と根気です。日々、忍耐と根気だよ」を肝に銘じ20年以上学生指導に関わってきましたが、堀先生の忍耐と根気の日々の中で私たちは育てられ、今の自分があること、そして堀先生に学んだ行動科学者としての責務を痛感させられます。

堀先生のもとで、大学院生、助手として同じ空間でご指導をいただいた期間は6年でしたが、その後の20年以上にわたり、常に見守り、様々な環境を整えていただき、根気強くご支援していただきました。1998年、堀先生は、国立精神神経センター精神保健研究所の白川修一郎先生の元で学ぶ機会を与えてく

✉ t-hideki@hirokoku-u.ac.jp



The World Federation of Sleep Research and Sleep Medicine Society, 2007 年ケアンズ
堀先生（中央右）、白川先生（中央左）、玉置先生、阿部先生（左端から）小林先生、田中（右端から）、小川先生（前列左）、松浦先生（前列中央）

ださりました。当時の国立精神神経センターには、高橋清久先生、大川匡子先生、内山真先生、朝田隆先生をはじめ、錚々たる先生方がおられました。「田中君、エベレスト、ヒマラヤ山脈、体感してきなさい」。東京に赴く際に堀先生にいただいたお言葉です。

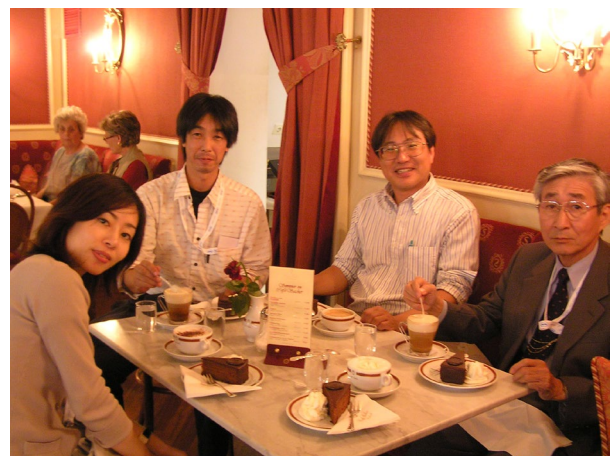
2001年に私が広島国際大学に着任してからは、折に触れお声をかけてくださり、林先生も交えて、合同の研究会を実施していただきました。退官記念講演を聴講した本学の学生15名中、7人が大学院に進学したことも印象的で学問の魅力を伝える堀先生の力量を実感しました。2012年3月、福山通運澁谷長寿健康財団睡眠科学研究所所長を引退される際に堀先生に呼ばれました。「田中さん、必要なものは、全部持

っていきなさい」と堀先生個人所有の Sleep 等の論文の製本（本棚1個分）と20世紀前半も含む様々な論文のコピーがギッシリ詰まった段ボール3つをいただきました。これが堀先生自身研究者としての一つの区切りだったのかもかもしれません。この引っ越しに連れて行った広国大生の一人に田村典久先生（現：広島大学）がいたことにも運命を感じます。彼は、本学で学位を取得後、東京医大で、井上雄一先生や駒田陽子先生をはじめ、高橋清久先生、大川匡子先生のご指導も受けています。現在の広島大学では、林光緒先生の多大なご支援を受けています。これも堀マジックではと、未来へつながり、希望も感じております。堀先生がつかないでくださったものの尊さを感じる日々が続いていくことでしょう。

堀研究室は、大学院で堀先生のご指導を受けようと、他大学、他分野からも学生が集まる研究室でした。私もその一人ですが、鹿児島大学の理学部で味覚研究をしていた大学4年生の時でした。「堀忠雄先生のもとで、学びたい！もっと知りたい！」ある本を読み終え、熱い想いがこみ上げました。早速、「脳と心のトピックス100」（堀 忠雄、斉藤 勇（編集）誠信書房1989/12/1）の著者である広島大学の堀忠雄先生に手紙を書き、お会いし、ワクワクするような興味深い話をたくさんしていただきました。あれから30年…以上たちますが、心が躍ったあの瞬間は今も鮮明に残っています。学位を取得し、広大を巣立った修了生に、常に心を配り、有形、無形のご指導、ご支援を根気強くしていただいた堀先生、感謝に堪えません。ご冥福をお祈りいたします。



The European Sleep Research Society, 2006 年インスブルク
堀先生（中央右）、白川先生（中央左）
林先生（左列前）、甲斐田先生（右列中央）



The European Sleep Research Society, 2006 年インスブルク
堀先生（右前）：林先生（中央右）
玉置先生（左前）：田中（中央左）